

ラオス南部サパイ・ドンコー村の伝統的織物と 人々のマーケットへの適応とその状況調査

—— Traditional Clothes and Current Market Situation in Sapai, Donko Village in
Southern Part of Lao-An Anthropologist Point of View ——

北田 綾

1. はじめに

ラオス南部チャンパサック地域は世界遺産登録から10年ほど経とうとしているが、人類学的調査はようやく始まったばかりである。本調査は2009年9月から2010年1月にかけて、織物生産地として知られるラオス南部チャンパサック県サナソムブーン地区のサパイ村・ドンコー村で行った人類学的調査であり、本論文は家内手工業である伝統的織物の変容と、生産に従事する織り手の経済活動に焦点をあてた調査報告である。これまでのラオス織物の先行研究としては Mary F. Connors の『Lao Textiles and Traditions』【1996】や、ラオス芸術織物生産グループによる『Legends in the Weaving』【2001】や、最近では Annabel Vallard の『Suivre Fil Ethnographie D'une Filiere Textile a Vientian』【2009】が挙げられる。しかしこれらの先行研究は北部や首都ビエンチャンに関するものであり、南部に関する研究が十分ではない。また伝統的に行われてきた織物も、現在この地域では市場との関係を切り離しては語る事ができない。それにもかかわらず、南部の市場との関係を論じたものは見当たらない。また南部では織物、特に絹織物の詳細な調査自体、殆どされてこなかった。ラオス政府は現在殆ど織物の統計を出していない。

本研究ではこれまで研究されてこなかったラオス南部の織物経済の状況を報告するとともに、伝統文化を継承する織り手たちが、市場にどう関わり、どういった環境の中で、変化するものと伝統織物の間の折り合いをつけているかを報告する。

2. サパイ市場の概念と織物市場

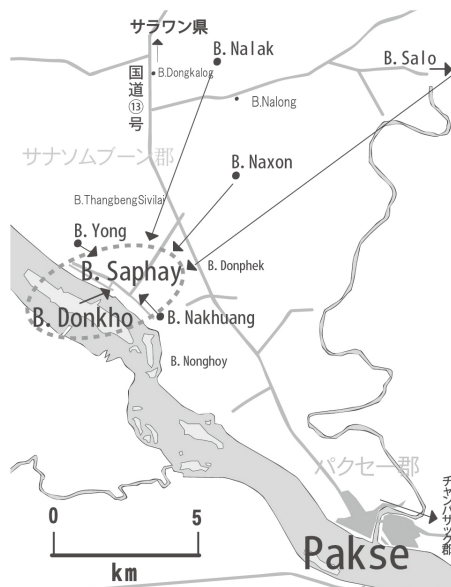
サパイ市場の概念を把握するにはまずチャンパサック県の中心都市パークセーの特徴を明らかにしておく必要がある。パークセー（パークセー郡）は、サパイ（サナソムブーン郡）の隣にある南部最大都市であり、織物市場にとってもラオス屈指の市場である。パークセーは華人の街であり、フランス占領時代に華僑が作った街である。現在もベトナム資本と最近では中国資本等も加わり、外部資本がパークセーの発展に大きく関わっている。パークセーの町は拡大しつづけて

おり、パークセーからサパイに通じる国道13号線はガソリンスタンドや商店が年々増え続けている。その発展の余波は確実にサパイにも来ている。

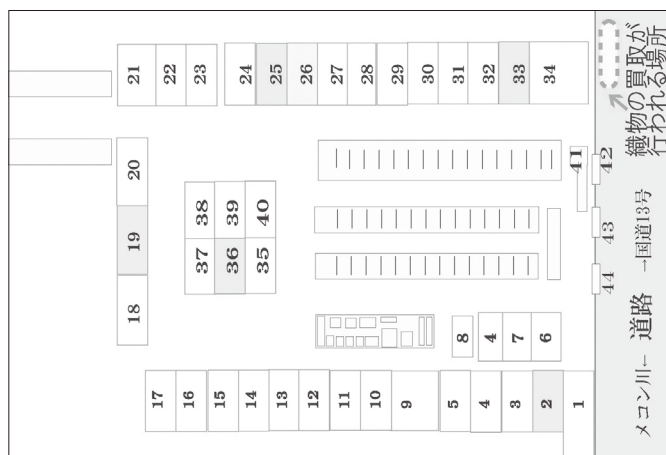
サパイ市場があるサパイ村はパークセーからおよそ12~13km 北上したメコン川沿いに位置する村で、サパイ市場は郡を代表する市場である。サパイ村の人口は3947人（男1836人 女2111人）〔サパイ村記録簿2009年度調査〕である。そのうち85%にあたる世帯が織物に従事している世帯は85%と世帯の多くに従事する。織物はサパイ村の重要な産業となっている。メコン川を隔てその中州に位置する村がドンコー村であり人口は382人〔ドンコー村記録簿2009年度調査〕である。ドンコー村の人々もサパイ生活圏で暮らしており、織り手数も同様に多い。本稿では織り手・買付人・織物店が共に多いサパイ村を中心に書いているが、経済調査はサパイとドンコーの両村で行った。

毎朝、周辺の村人が商売や買物をしに小道や国道13号線を通り、小型バスや自家用車で、またメコン川を渡り舟でサパイ市場に来る。サパイ市場を構成する村はサパイ村（サパイ村はヌア地区・カン地区・ボンケオ地区・ボーサイ地区の4区から構成される⁽¹⁾）やサパイ村にアクセスしやすい近隣の村々であるドンコー村、サロー村、ナーラック村、ナーソーン村、ナークワン村、ニョーン村などである。【図1】 これらを除いた村は地元の小規模市場で買い物を済ますか、むしろ南部中心都市パークセーへ出てしまう。市場は朝6時から始まり7時迄が最も活況を呈する。各村々から新鮮な野菜や肉、魚等が持ち込まれる。

織物の売り買いもそうした時間帯に行われる。市場は【図2】のような配置になっており、主な商品は【表1】のような種類になっている。織物関係だけ扱っている店は少なく奥にあり目立たない。それ以外の店は雑貨販売とともに糸、シンを扱うところが多い。【【図2】：No2, 19, 25, 26, 33, 36】。通常、織り手は自分で織った織物をこれらの場内の店ではなく、市場に面する道路【図2】の“織物の買取が行われる場所”で待ち受ける買付人達に売る。買付人達は織り手が持ってきた織物を奪い合うようにし買い取りが行われる【写真1】。現在織物は製作すれば売れるという状態にある。ただ値段は低く抑えられている。サパイ村の外から来る織り手達は自らが持ち込んだ織物が売れると、その日得た資金を使い市場で食量などを購入し帰路につく。



【図1】 サパイ市場へアクセスする主な村々



【図2】サバイ市場概念図

【写真1】織り子と買い付けが
売り買いしている様子

【表1】サバイ市場の出店店舗例（2010年調査）

No	性	歳	店舗形態	出身村	織物店
1	女	23	化粧品・食品・菓子・魚餌・料理器具・傘	サバイヌア	
2	女	24	化粧品	サバイカン	
3	女	48	シンスカート専門仕立屋	パンニョーン村	シンしか仕立てることができないためシンのみの縫製を行う
4	男	68	薬屋	サバイヌア	
5	女	54	米・唐辛子等の食品・飲物・洗剤・傘	ソンボー村	
6	女	45	仕立屋	サバイボンケオ	
7	女	46	服・シンスカートの布・絹糸	ナックワン村	洋服と共にシン・絹糸を販売。
8	女	33	服・靴・鞆・帽子・文房具	サバイカン	
9	女	35	服・靴・鞆・学生服・寝巻	サバイポーサイ	
10	女	18	写真屋・テレフォンカード・VCD/CD・携帯電話関係商品	サバイカン	
11	女	40	靴・鞆・帽子・下着・靴下・シンスカート・パペー(ショール)・タオル・文房具・蚊帳	サバイカン	雑貨店と共にシンやパペーを販売。
12	女	37	傘・飲物・菓子・洗剤・調味料・スポンジ・ビニールひも	サバイカン	
13	男	-	VCD/CD	サバイボンケオ	
14	女	40	服・子供服・糸・砂糖・ミルク等の食品・タバコ・歯ブラシ石鹸	サバイカン	糸の種類が豊富。
15	女	15	野菜・菓子	サバイカン	

3. 織り手と買付人とその慣習的システム

この織物の買い取りが行われる場所が織り手と買付人の自由な市場となる。なぜ自由な市場となるかというサバイ村内の織り手においては既に織り手と買付人の両者間で、拘束力はないが、ゆるやかな繋がりが出来ていることが多いためである、この拘束力のないゆるやかな繋がりがあするためサバイの織り手は朝市にわざわざ行かなくとも何時でも布を買い取ってもらえるのである。そのゆるやかな繋がりとはいくつかの関係である。織り手が金銭的に困れば、買付

人が製作した布を買い取ることがある。その際、買付人が望んでいる品物でなくても日頃の付合いで買い取る場合がある。また日頃の付き合いのため支払日前に給料を渡すなど織り手に金銭的に融通をきかすことがある。上手い織り手の場合には毎回高値で買う事がある。また織物道具や糸等の物資を渡し、その出来た布を必ず買い取る等の仕組みがある。これは織り元と賃織の関係と同様である。

このような慣習的構造は織り手と買付人双方にとって重要なことである。なぜなら買付人にとって1枚でも多くシンを買い取り、良い織り手を多く確保しておきたいという事がある。一方織り手にとっても買いたい人が来たら売るし、訪れた外国人が見て欲しいといったら売る。誰も来なければ近所のお得意の買付人に購入してもらうなど自由な交渉が可能である他、いつでも買い取ってもらえる場所があるという安心感や、安いか高いかと言う問題はあがるが、値段が安定しているといったことや様々な点で、融通をきかせてくれやすい等の利点がある。

サパイでは主要な織物店が中心的な買付人となっている場合が多いが、サパイの買付人の中には買い付けのみ行っている者もいる。買付人達は主にサパイの布をそれぞれの織り手から買い取り各地域へ出荷する。サパイ村の買付人を通し買い取られたこれら織物の多くは主に首都ビエンチャンや南部都市パークセー・地方都市（少量であるがアッタプーやセコン）等に出荷される。

買付人が店を持っている場合、観光客や一般客に織物を販売する。観光客の場合、ラオス国内やタイ人、フランス人、カンボジア人、日本人等が訪れるということであった。[サパイ2010調査]。また東北タイのウボンラチャタニやカンボジア等からも買付人がサパイを訪れているという。[サパイ2010年調査]。そして織物店織の村でのより重要な役割は糸等、織物資材を地元織り手へ供給することである。織り手たちは織物のほぼ全ての資材を地元サパイの織物店や買付人からの供給でまかなっている。

大量の布を扱う織物店ではビエンチャンへの出荷が90%にもなる。（調査では仲介人に託す場合と自分で直接行く場合があり、搬送回数としては1ヶ月に2回程度ビエンチャンにシンを搬送する店舗が多く、南部都市パークセーへの搬送は週に2・3回程度が平均的だった。[いずれも2010年調査]）。なぜならサパイやパークセーで売るより高値で売れるからだという。買付人がビエンチャンへ行く際はビエンチャンの最新の柄や色の布を購入し、その布をサパイで売る。またビエンチャンで見てきた、流行りの柄やデザインを織り手に伝えたり織り手にオーダーしたりする。このようにして買付人は、より布が売れる方法を模索する。小規模店の買付人達はパークセーへの出荷が中心となる。買付人の中には海外のつてを持っているものがおり、海外へもシンを搬送する。調査ではこれまでにカンボジアやタイ、ベトナム、アメリカ合衆国、日本等があった。[2010年までの調査]

このようにして主要な織物店ではビエンチャンや他都市に出向き、やり取りする一方、地元根付いた習慣の中で地元織り子との関係を維持している。買取り人や織物店の人々は車を保持し、

全体を見渡せる自らの利点を生かし新しい環境に身を投じつつも、地元の伝統織物を続ける織り手との関係を維持している。サバイではまだ車の保有率が裕福な家庭に限られる。現在サバイの買付人が23人、織物関係の店舗数が23件（織物・糸・織物資材等の店舗も含まれる）となっている。[2010年元副村長への聞き取り調査より]

サバイに在るこれらのシステムにより、早朝市場に織物を持ち込む織り手の多くはニョーン村、タンベン村等の上記のような関係を持たないサバイ村以外の織り手であることが多い。

4. サバイの織り手の経済状況

4-1 乾季の経済

本研究でいう織物とは主にラオス伝統衣装シン（Sin）のスカート布のことである。サバイ・ドンコーでは家庭の平均年収が1,052USドルである（1USドル=8,020 KIP：2010年10月）[サバイ村記録簿2009⁽²⁾]。それ以外の収入源としては商売・漁労との組合せが次に多く、公務員・教師・大工・警察・家具作り・菜園・魚飼育・海外／国内からの仕送り（アメリカ合衆国・ビエンチャン・タイ）等があった。

織物は一般的に雨季の間行われる稲作の後の米の収穫後の乾季に行われる。織物は乾季に値段が上がり雨季は値段が下がる。雨季は多くの村人が農作業を行うためシンを着ないが、乾季になると祭りや行事（結婚式や家の建て替え等）が重なり、シンの着用機会が増えるためだ。

織物をする世帯は、調査世帯78人中64人（84%）であり村算出の平均とほぼ同じである。調査では世帯平均収入の44%が織物収入でまかなわれていた。これは織物で生計を立ててない世帯も換算されているため、織物をする世帯だけで見ればより家計への織物の依存度が高くなると思われる。布は1日に1世帯平均1.4枚織る。布一枚の平均価格が28,000KIPであった。[2009年調査]。

政治経済学の分野では織物・工芸は土地不足の地域で果たす大きな役割があったとするのが一般的である。家計の不足や食料不足の農閑期を補う役割があったということだが、それはサバイ村において織物だけで生計を立てている家庭が78世帯中2件のみだったことからそれは明らかである。その2世帯とも一人暮らし（56才）であったり、母（58才）と娘（22才）の2人で日頃教育費や洋服代等がかからない成人の世帯であった。

乾季にはこのように織物を行う家族では織物が主な現金の収入源になっている。織物をする殆どの世帯は「織物+稲作」の兼業であり「織物+稲作+漁労」、「織物+稲作+会社員」、「織物+稲作+商売」という組み合わせが特に多かった。

4-2 織り手の仕事・雇用形態と諸費用

織り手には2種類あり雇われて糸を提供してもらい織る織り手と、自分で糸を購入し織る織り手がいる。雇われた場合1枚のシンの値段は10,000KIPである。一方自分で織る場合は1枚平均

25,000-28,000KIP だった [2010年8月調査] 1US ドル = 8,020KIP : 2010年10月)。後者の方がもちろん収入的に望ましいのだが、前者の織り手の場合には資材を購入する資金がないため買付人に資材をもらって作るのである。なお資材を一式揃えるのには以下のものが経費としてかかる。なお一度一式揃えると縦糸・横糸・ビニール紐・合成染料の購入のみになる。

【表2】 織物準備にかかる生産コスト 2009 年調査

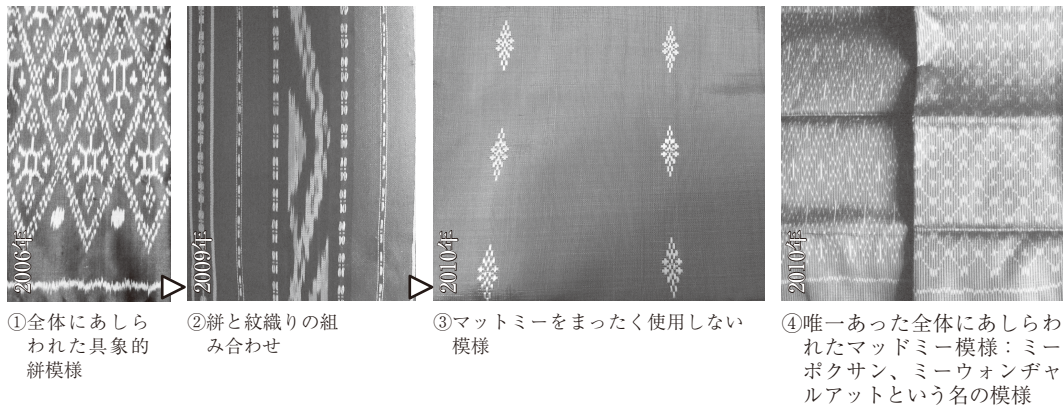
項目	価格
機+付属物	800,000 ~ 1000,000KIP
箆（おさ）+ 綜統（そうこう）	300,000 ~ 350,000KIP（そうこう：縦糸を引き上げる道具）
刀杼（とうひ）	100,000 ~ 20,000KIP（横糸を打ち込む道具）
杼	5,000 ~ 6,000 ~ 7,000KIP（横糸を通す道具）
ラー	100,000KIP 程度（横糸準備用器具）
コン	50,000 ~ 160,000KIP（横糸準備用器具）
マイニェーウ	30,000KIP（縦糸を整える道具）
かすり用ビニール紐	3,000 ~ 4,000KIP（以前バナナの葉を使用→現在ビニール紐）
合成染料	2,000 ~ 5,000KIP
ラックミー	50,000 ~ 75,000KIP（横糸染め用器具）
ラッコンミー	200,000 ~ 350,000 ~ 400,000KIP（横糸染め用器具）
カボック	18,000KIP / 1 個（横糸準備用器具）
ドー	自作
縦糸	250,000 ~ 350,000KIP（イタリア製糸で 30 布用の場合）
横糸	1 束 5,000KIP ~ 6,000KIP（中国製糸・イタリア製糸）
マッドミー糸	1 束 25,000KIP（すでに緋模様が施されている糸）等

5. 織り手を取り巻く環境・嗜好の変化

5-1 シンの模様の変化

サパイの店頭に並ぶシンの模様は毎年流行に合わせ変化してきた。2006年～2007年に筆者が訪れた際には1年経過してもそれほど大きな変化が無くサパイの伝統的な幾何学模様や具象模様が店頭にいつもと変わらず並んでいた。現在、模様の変化は年々早まっており半年もすると違うデザインが店頭を飾る。

2006年調査時にはサパイのオリジナル模様としてマッドミー（ラオス語の緋染）を全体にあしらった象・鳥などの具象模様が多用されていたが⁽³⁾【図6-①】、2009年マッドミーの具象模様は部分的な使用に留まりマッドミーと紋織りの組み合わせが流行っていた【図6-②】。2010年は具象的マッドミー模様がほぼ姿を消し、直線模様や洗練された花柄模様であるジョック（縫い取り織り）で織られたなど、マッドミーをまったく使用しない模様が大半を占めた【図6-③】。サパイ柄の特徴である伝統的マッドミー（緋）をあしらったものは少数で、今年2010年唯一のマッドミーで売れゆきが良い商品は小さな模様が全体に入った極めてシンプルなデザインのものであった。【図6-④】



【図6】2006年を経て2009年と2010年の人気柄

5-2 ティンシンの製作状況の変化

ティンシンはシンスカートの裾につける飾りであり、かつてサバイ村・ドンコー村でも作られていたが、2006年調査した際、ティンシンはサバイ村では製作されておらず、ドンコーでは2人のみだった。しかし数少なくなった織り手である彼女達も近い将来「よりお金が稼げるシンに変える」と話していた。[北田 2006]⁽⁴⁾。ティンシンはジョック（縫い取り織）という技術を使用し時間がかかる上に、シンと同様にティンシンの価格も近年下落傾向にあり織り手の経済状況は厳しい。

さらに2010年に入り中国の工場で大量生産され10,000KIPと非常に安価である。色彩も鮮やかであるため、猛烈な勢いで手織りのティンシンを駆逐している。そのティンシンは手織りでは作るのに非常に時間がかかるだろうと思われる幾何学的な模様と金・銀の糸をあしらった多色の鮮やかなものが多い。生地の手織りに比べ非常に薄く、丈は最近の流行に合わせて短い。逆に手織りのものは手織りでしか出来ない優雅さや気品があり、厚く、丈は短いものも長いものもある。しかし値段は機械織りの数倍する。サバイ村・ドンコー村で手作りのティンシンは瀕死の状態であり、すぐにもティンシンを作る人がいなくなる可能性が高い。

5-3 糸について

糸は良質な糸も、そうでない糸もほぼ全てがビエンチャンを経由しサバイに入る。南部中心都市であるパークセーで販売される糸も殆どがビエンチャンからきている。よって織り手や買取り人達も含め、上質な糸に関し糸が海外産のものなのか、ラオス産のものなのかがよく分かっていないこともしばしばある。現在サバイで見られる糸には中国糸、イタリア糸、タイのコンケンの糸、マイサムレットと呼ばれる糸等がある。調査した結果、サバイで使用される、それら糸の種類と質はサバイの織り手によると以下の様に分類される。[サバイ2010年聞き取り調査]。

①マイサムレットと呼ばれる糸で最も良質なものと村人が定義する糸。工場糸だが細く柔らかく織るのが非常に難しい糸である。(マイサムレットもさらに糸の太さに種類がある)

*マイサムレットと呼ばれる糸は高級な糸であるが、産地や呼称の定義が曖昧であり、人により異なる。高級なシンにはマイサムレットが使用される事が多い。そして出来上がったシンは祭事や儀礼等の特別なときに使用される。

②ラオスの糸でマイラオ・マイモンなどと呼ばれる。2番目に良い糸とサパイの織り手が定義する糸。手作りのため糸が太く均一でないが値段はマイサムレットよりも高い。

*首都ビエンチャンではこの手作りの糸が一番高級とされる事が多い。

③マイコンケン（タイ製工場糸）やベトナム製工場糸

③イタリア製糸

④中国製糸

国内産のラオス絹糸は上記で述べた理由のため、それらの質の良さを認識しつつも、家計の収益として効率的に作製したいと考えるサパイの織り手に経済効率の面から敬遠されがちである。よってサパイで生産される織物の多くは高級なシンではなく普段着に着的シンが中心である。絹糸は縦糸にイタリア製の絹糸、横糸に中国製の絹糸を使用する。中国製の糸は工場で作られた糸で丈夫で作るのに困難さを伴わない。ただし出来上がったものは、ごわごわとしており、数年で切れてしまう。高級糸で製作されたシンが洗濯機などで洗えず管理が大変なのに対し、これらサパイで生産される布は耐久性が無い代わりに安価で洗濯洗いでできる等、手入れが簡単であるという利点がある。織り手が中国糸を使用する理由について、安いし、作りやすいし、作ると売れるからと言う。[サパイ調査2010年]。

サパイ村の対岸にあるポントーン郡のサマン村・サクムアン村は高級糸であるマイサムレットを使用し織る人々が多い事で有名であったが、現在マイサムレットで作られたシンは売れ行きが悪く、材料費が高く、作るのが困難な上、織ってもなかなか買い取ってもらえない状況である。そのためサパイ村と同様に中国糸に変える世帯が増えている。

尚ラオスの絹糸の生産状況に関しては久保により以下のように言及されている。[久保2002]⁽⁵⁾「ラオス蚕糸業に必要な諸物資についても一般必需品と同様、近隣国からの輸入に依存している。特に整経用器械生糸はその殆ど全量をタイ、ベトナムから輸入しており、また優良蚕種（二化性白色繭）も一部はタイ産、最近では中国雲南省産を使用している状況である。現今の蚕糸業の実態は表面上全く統計にも現れない。極端な原糸不足となっており、経糸（整経）用に生糸の輸入をせざるを得ない状況にある…販売数量や品質価格面においてもタイ国及び中国雲南省産蚕種、日本産蚕種には到底太刀打ち出来ず低迷の一途を辿る気配である。」

著者は2010年現在、サパイでベトナムの糸を使用しているという話は聞いていないが、ビエンチャンから購入してくる糸の中には産地には不明なものも多く、今後ビエンチャンでの糸の原産

地の追跡調査が必要だろう。

近年、キリー村・カムヤー村やベンチャー企業、ITC（Inter National Trade Centre）等の団体が積極的に桑畑や蚕の生産に取り組んできたが、絹糸を生産しても自分の工房で織り手が織るため、他に売るほど絹糸が残らない状態である。[2009年 ITC にて調査]。

さらに糸の種類も大きく変化している。かつては金や銀の糸はフランスから持ち込まれた高級糸であったが、現在、金銀糸はアクセントとして広く使われており、色彩も七色に光る糸、縞柄の入った糸、パステルカラーや合成繊維等も加わり、シンに使われる糸の志向も徐々に変化している。

5-4 環境の変化の中におかれるシンの織り手

サバイの織物が大きな市場を中心に回っており、またさらに詳細に見ればサバイの織り手の糸が、全て首都ビエンチャンを通過するという事は、以前より地域性を無くした、より均質化された布が全国でも生産されることを意味する。こうした市場の構造は、物理的变化や環境変化だけでなく、受容する人々の志向にも変化を与えらると思われる。

織り手達本人が意識しないところで物理的には全国的な均質化が進んでいるといえる。これはサバイ村が一地方にあるという概念を超え、模様やデザインがより全国的な流行に応じて行くことである。

過去においてラオスで織物は自分の家族が普段の生活や儀礼の際に使用する為に織られるものだった。交通が発達していない時代は自給自足の生活は当然だった。織物もまず綿や桑を植え付け、育て、収穫し、糸を紡いで、周囲の草木や木の皮から採取した染料で染め、機を織っていた。それは現在70歳を超える女性のさらに上の世代（彼女の両親の世代）の話である。70歳の女性の世代の頃には蚕は育てておらず、糸は40km 以上先のキリー村・カムヤー村まで歩いて糸を買いに行っていた。織物の模様は親から受け継がれた模様であった。[サバイ村インフォーマント 70歳 女性 2010年調査]。

チャンパサック郡のインフォーマントによると2008年「現在、染料は離れた森に行かないと採取できない」と言っていた。それはサバイも同じである。自然環境が大きく変わった。サバイ村の場合メコン川沿いにあった多少の桑畑が現在は無い [サバイ村インフォーマント 54歳 男性 2009年調査]。

布の柄に意味が込められた時代、ナーガ（河に住む竜）は身を川から守ってくれるとされたが、現在は1つのパターンとして、かつて伝統的なデザインとして広く使われている。またテレビからの影響が織物にも及んでいる。テレビから織物の発想を得たという織り子もいた。[サバイ 42歳 女性 2010年調査]。ラオスに限らず映像はいつでも多くのインパクトを知らず知らずのうちに与えている。情報化の波が織物のアイディアにも影響を人々に与えている。携帯電話、車の

普及も移動や情報の行き来を容易にしている。ピー信仰（精霊信仰）に関し、特に都会に暮らす若い世代は信仰していない人が多い。

それでもサパイの織り手の生活は未だに人と自然が互いに影響を受け合って生活しているように見える。それは早朝の托鉢風景や身近な家畜の存在、軒下での織物、1日がかりの稲作作業、夜8時以降には寝支度をするという毎日繰り返されるサイクルのせいだろうか。まだ家族中心のコミュニティーを失っておらず、時間感覚に関しても農業中心の生活者が多いからだろうか、どの家でも時計があるが、殆どの時計が止まっている。小刻みな時間感覚が未だ、それほど必要とされないのだろうと思われる。ただし織物の模様は変化しているのであるが。

以上述べてきたように織り手の生活サイクルは以前とさほど変わっていないように見受けられるが、物質の変化や、市場の志向の変化がサパイの外部で起こっているように見える。そして織り手自身は織物を織り生計を立てているため、より売れるデザインは何かと求める結果、伝統的な織物産業であっても本人たちが意識しているか否かに関わらず、少しずつ変化を迫られている。

6. ラオスの織物の変遷

ラオスの絹の歴史は4500年以上昔中国で始まったと言われているが、それが東南アジアへ広がったとされる⁽⁶⁾。また少なくとも3000年間ラオスでは女性が絹織物を着用していた⁽⁷⁾。このような古い起源を持つラオスの絹織物は、その後、以下の記録が残されている。

「年代記には、14世紀半ばにランサーン王国を樹立したファークム王が地方領主に対し金、像、奴隷などとともに綿や絹の貢献を命じた記事が見られることから、少なくともそれ以前にはそうした技術が広く普及していたのではないかと考えられる。」⁽⁸⁾とある。また17世紀、探検家 Gerrit Van Wuystof は1641年にビエンチャンで与えられたシルクのすばらしい質について述べている。[Mary F. Connors 1995]⁽⁹⁾

そしてここチャンパサックでも、ランサーン王国が分裂した後のチャンパサック王国⁽¹⁰⁾（1713年～）で伝統的な家内制手工業としての織物はあったはずだが、その織り元はチャンパサック郡であった可能性が高い。サパイはその織り元としては機能していなかったようである。なぜならパークセーやサパイより、チャンパサック郡の方がはるかに織物のデザインや種類にバラエティーがあり、手が込んだデザインや城の模様（カンボジアの儀礼の際に使用するビダンの影響とも考えられる為、城の模様で即、織り元であると断定はできない。）が検出されるのに対し、サパイではそれを示す情報が現在著者が調査している範囲では見当たらないからである。

インフォーマントによるとサパイの70歳代の女性は糸をはるか遠くのキリー村・カムヤー村（約30km）まで歩いて糸を買いにいったし、その親の世代は蚕を育てていたが、小規模なものだったようだ。[2010年インフォーマント 70歳 女性 調査]。なぜこのように織物が一時廃れてしまったのか。G. エバンスによるとラオス国内で織物は1950年代後半から急速に減退した、

戦争と輸入糸の結果だった⁽¹¹⁾という事や1975年代の体制成立後、綿育成と蚕育成は著しく減った⁽¹²⁾結果である。それに関し Mary F. Connors により詳説されているので概略を載せる。

「1975年の紛争の後、人々の大きな移動があった。フアパンやポンサリーなど北部ラオグループのメンバーがビエンチャン平原へ降りて移住してきた。そして前政府と関連があった多くの低地ラオが国を離れた。この分裂の間、女性は織物をやめた…。同時に現在ビエンチャンに住む北部ラオグループが主な家の伝統財産を統制し、新しいラオス政府は女性のスカートや肩にかける布の中に様々なラオグループからの要素を組み合わせる事により、グループの差異を忘れさせる、女性のためのコスチュームを促進し始めた。

ラオ neua や北部ラオグループからの時代を経たものがラオスの外に現れ始めたとき、織物の部分や壮麗な美しさのために直ちに興味が持たれた。それらのテキスタイルは巨匠の織り手の仕事だという証しだった。またラオの織り手たちがもはや織っていないということが知られるようになったとき、シルクが永遠に失われないようにする様々なステップが取られた。政府、私的な、そして公的な組織が織物を促進するために動き始めた。商業的に織り物するために外国の専門家が都市に住む女性を訓練するために招かれた。ラオ女性同盟は離れた村々の織物を促進、維持する際に、草の根援助を提供する事業を開始した。織物協同組織が奨励された。1980年代後半に、国は訪問者や私的な起業家に対しドアを開き始めた。外国と国内の両方で伝統的な技術やモチーフに基づいた現代的なテキスタイルの生産を促進するために、織物ワークショップが織物の師の指導の下始まった。ツアリズムもまた織物に対す要求を引き起こした。小さな織物村は今や殆どの観光のハイライトである。それらの村は経済的にとてもよくやっているため他もそれらをまねしている。」[M. コナーズ1995]⁽¹³⁾

サパイはランサーン王国時代当時、織物で有名な土地ではなかった可能性が高いが、現在では南部の機織の村として広く知られるようになり、特にマッドミー（緋）の柄で有名である。しかし戦争を得て復活した織物であるが単純な復活ではない。織物は合成染料に既になっており、糸も中国製であった⁽¹⁴⁾。そういう意味で復興とはいっても昔の織物、昔の色彩ではない。著者の過去の調査で織物の色彩が天然染料だった時代は、よく染められた濃い色に価値があり美しいとされてきたと結論づけたが⁽¹⁵⁾、濃い色は現在でも相変わらずサパイの人々に人気があるが、その色彩や明度、彩度の好みは様々な合成繊維や素材が入ってきた今、複雑さを増している。

何故一回減退したはずの織物がサパイ村・ドンコー村と近隣の対岸にあるポントーン郡（サマン村・サクムアン村）でも現在織物が盛んになっているのか？インフォーマント [25歳 女性 サナソムブーン地区出身 観光局職員] によるとサナソムブーン地区で初めて蚕を育て、織物を行った場所だからであるということである。そして小さい模様を作ることができる上手な織り手が他の村よりも多かったということである。また現在復興している理由としてパークセーという南部の大きな市場がサパイ村に近かったということも織物の復興の理由の一つとして著者は考えて

いる。

7. 織り手が必要とする情報はどのように収集されるのか

現金経済で成り立っている以上、織物はいつでも市場が支配している。作り手は決定できない。よって織り手の織る物も、織り手の慣習さえも市場の好みに合わせ変わっていくと考えられるが、しかし織り手もただ受身でいるだけではない。織り手も売れる布の情報をそれぞれの方法で収集する。以下では織り手の情報収集がどのように行われるかをここでは見る。ロナルド・ウォーターベリー⁽¹⁶⁾がメキシコの布の市場に関して述べるように彼女らの仕事は常に織物の社会的な意味合いよりもむしろ社会的家計の収益との関係のみで理解されている。そして卸売人は高い質よりも安価なものに興味を持つようになって「商売向けの等級」と呼べるものが生まれてきたと言っている。サバイのシンもこの状態に非常に沿うものである。

ラオス南部の織物の売れ行きに関する情報は主に口頭で伝えられる。そのため地理的に近距離であるといった特定の条件下で情報交換は行われる。そうした閉鎖的な情報が朝市での織物の買値や売れ行きを決める過程でもある。模様の情報はどのように決め、色はどのように決められるか？売れ筋に関する模様・色の情報には以下のものがあった。①同居している親族や近所の親族や知り合い、②買付人による情報、③親から代々伝わったもの、④テレビや紙媒体から見て考え出したもの、⑤自ら考え出したものなどがあった。優れた織り手はマッドミー（緋）で真似たい模様を発見したら、すぐに同じ模様を作ることができるという。そのため作る際、万が一情報が外に漏れても次の新しいデザインを考える為問題ないとインフォーマントは言う。[サバイ村 54歳 女性 2010調査]。そして「外国の織物業界はけちだ」と言った。それは模様が外部に漏れないように教えたりしないからである。ここでは織物の模様話は企業秘密ではなく場合によっては周りと共有するものであるようである。[2010年調査]

8. サバイの織り手達の親族的繋がりとは原初的産業化段階にある織物社会

ラオスのこの地域の母方居住の伝統によりそのデザインは他へもれず、村の中で収まっている。子供のうち、息子は結婚すると家を出、長女、次女は結婚すると実家に近いところに家を構えることが多い。末娘が残り家を継ぐ。サバイ村から出た女性の多くは織物を継続しない。なぜなら織物の設備が無いからである。逆にサバイに嫁いだ女性が織物を教わることもある。こうすることにより織物の伝統・模様がサバイの村から拡散することなく維持されていると考えられる。インタビューを続けている中で織り手とバイヤーが親族関係であったケースは6件調査した中で2件であったが強固なものではなかった。現在織り手にとっての市場は、親族のつてを頼って売ったりする程十分に広がっていない。その理由として織物のみで生計をたてることが困難であり、また織物を織る人数も女性が多数を占め（著者が出会った男性の織り手は調査した2006-2010年ま

での過去5年間でたった2人だけであった)、たとえ家族に女性が多かったとしても家の中で設置できる機の数も空間的に限られる。また高齢者は目が悪くなり、健康的な理由から引退してしまうケースが多いため、織れるメンバーというのは限られているからである。買付人の親族的繋がりについては織物関係の仕事に従事している親族がビエンチャンや他の都市でも多くなく、会社員・教師・医師など織物とは関係ない仕事に就いているケースが多い。よって親族関係の繋がりが、わずかにあると思われるが、その親族によるネットワークの蓋然性は少ない。

これまでの調査において、親族関係のみならず、サパイの織り手の社会的ネットワークも全く組織だっていない。彼女らは正式な組織を持っておらず、その組織を作る必要性も感じてない。それぞれが個々に買付人と取引し、買付人同士もそれぞれ家族単位で動いている。かつて一度ラオス政府の主導により農協が組織されたが失敗したためそれ以降はそういった積極的な組織は作られていないと村長は言う〔村長 2010年調査〕。

メアリー・ダグラスは「最も未分化な経済にあっては、生産機構におけるさまざまな役割が市場への思惑によって決定されることはなく、特殊技能をもった労働者や職人はほとんど存在しない」という。〔メアリー・ダグラス 1985〕⁽¹⁷⁾

サパイにおいて現在のところ、職人のような存在の織り手はいない。上手な織り手は確かにいるが、それら女性達の技術は相対的な上手さである。また彼らは職人や専門家の意識も抱いているように見えない。また他の人々から賞賛されている様子も見受けられない。彼女らは普通の織り手とともに同じものを製作している。しかしながらアイデアを形にし、細かく手間のかかる作業・模様を美しく作れる面で他者より優れている。村一番の上手な人を紹介してくれるか？と著者が村人に頼んだところ親戚や、知人を紹介してくれる事が多かった。つまりここサパイでは基本的に彼らは専門家のような意識を持ち機織をしているのではない。かつて時間をかけて作られたシンは自給自足のための生業であり、そこから換金織物を主体とした商業的工芸へと、織物の構造が変化した、いまだにそこには生業のなごりがあるのではないか。

この状況はラオス特有のものではない。16世紀の中国の家内制手工業では蚕から絹の生産がおこなわれた。それは人口が増え農業の土地が狭くなったため、その分絹糸の生産に乗り換えた。中世の中国江南の蘇州では絹織物・綿織物が経済の発展に非常に大きな影響を与えた。現在のラオスはそのような国の前近代的社会の、原初的産業化の段階の状況に似ている。

9. おわりに

織り手たちは伝統文化や市場とどう立ち向かい、どのようにその模様や色彩、糸、品質を決定しているのだろうか？グローバル化、経済的発展、情報の高速化、貨幣経済はサパイの織り子の伝統にどう影響しているのだろうか。ローカルノレッジ（経験価値）は織物の中に今もどのようにして生きているのか？織り手たちの経験や知識は結局、織物に見ることができるだろう。伝統

的行動様式というものは直ちには見えにくく、しかし織物にはそれが詰まっている。伝統的行動ともいえる農業と織物の生活を続けている織り手たちと、布を買い付け、販売するため全国を駆け回る買付人達のその両者の行動範囲は対照的である。高齢の織り手達は以前、地元産の絹を用い、布を織っていただろうが、現在サパイで作られる布の質は高級布とは言えない。デザインも入れ替わりが激しいが織り手達は自分達のサパイの模様自信を持っており、親から受け継いだものであると自信ありげに答える。現在、年配の人々の昔の知識と昔から使用されてきた残る現物だけが伝統や経験、知識を伝えている。伝統社会の記憶装置としての布がある。ローカルノリッジはこの織物の中にある。

今後は物質調査をまとめ、さらに経済的な側面を補強し、織り手のローカルノレッジと環境変化に伴う適応のあり方の観点で追跡して行く予定である。

注

- (1) 以前は4村に分かれていたが2007年より合併し、一つの村となっている(村記録簿 2009年調査)
- (2) サパイ村記録簿2009-サパイ村の村長が管理しているノート。村で行った人口・世帯統計などが載っている。がしばしば計算が間違っていたり、数が合わなかったりするが全体を把握するのに便宜的に本調査では使用させていただいている。今年2010年は8月末現在まだ出ていない。
- (3.4) 『チャンパサック地域における織物のパターンと色彩に見る感覚調査』北田 早稲田大学文学学術院文化人類学年報第3巻, 2006. pp.62-68
- (5) ラオスの蚕糸業 日本ラオス協会理事 久保 泰朗 2002.8.1.号
- (6) 『絹文化財の世界』の中において出土絹織物で最も古いものは河南省滎陽県青台村で発見された紀元前3500年頃の平織りや絞経(こうけい)織物であるとしている。次いで有名なのが浙江省湖州市南方の銭山漆(センザンヨウ)遺跡からは4750年前と推定される絹の平織物、撚糸、組帯等が出土している。やがて紀元前2千年後半に甲骨文字が出現すると蚕・桑・絲・帛の文字が見られる。とある。
『染色の文化史』の中では以下のように述べている。先史時代中国においてB.C.2000年ごろの彩陶土器とともに、蚕の繭が出土していましたので、そのころすでに生糸が存在して…。最近の研究によってリョウショ文化期(B.C.3300～2300年)に絹織物が存在していたことも確認されています。殷王朝の青銅器に、絹の綾織物が鋳びついていましたし、時代は少し下りますが、多数の絹織物が発見されていることから、中国は太古から絹の国であったといえます」とある。また「周代には古くから役人の制服は絹で作ることに定め、しかもその色と模様によって階級を区別しました。したがってB.C.1000年ごろには、制服を製作するための役所…生糸を扱う外工および内工、製織と縫製を行う織経…などの国営工場をその管轄下におきました。」
- (7) "Legends in the Weaving" [Dara Kanlaya 他. 2001] P15. の中において以下のように述べている。「ラオのシルクの起源について歴史的に書かれたものは無いが、民間口承や多くの物語の中に認めることができる。それはラオタイの人々の絹や織物の起源について情報を提供する。ラオの歴史文学家はこのジャンルの口承文学が巨大湖 *Nong Sae* または *Talifu* の近くに当時居住していたラオ民族グループに受け継がれてきた可能性を予測している。それは紀元前1000年前だった。中国歴史解説の中に書かれている。その書は紀元前約1000年前に、*Thaen* または *Thiane* と呼ばれる王国があった(Yangtze 川沿いに発見された)事を示しており、その王国の人々は蚕の育て方を知っており、それらの繊維は布地製作のために紡がれていたとしている。別の文書では紀元前700年ごろ *Nong Sae Lake* 湖の *Tai* 人の故国について述べている。そこでは「*Nong Sae* 王国の中の西に *Li Linh* 山がある。…*Kouk Ching Chao* 町と *Thinh Si* 町の間で、人々は蚕を飼っている。蚕が育つ20日後、シルクが生産される。このシルク糸はその後美しい絹の繊維として織られる。*Tai Vo*, *Khiri* 町では蚕を飼っていない…。彼らは大麻繊維を使用し、その材を買う。」と述べている。その史書はまた市

場品についても記述している。自然のシルクと色彩に富んだシルク布がある。良質の白いシルクは親指サイズの大きな貝と交換するために使用される。これらの口承・史書説明や様々な民族グループのラオ女性織技術の多様さはラオの人々が少なくとも3000年の間蚕を飼い続け、シルクを染め…ていたことを示している。」としている。

- (8) 『ラオス概説』 ラオス文化研究所編者 2003 pp.246-247
- (9) "Lao Textiles and Traditions" Mary F Connors 1996 p.14
- (10) 『ラオスの歴史』 上東輝夫 1996 p.209
- (11) Grant Evans 早稲田講演「Revolution & Memory in Laos」2006年5月25日
- (12) "Legends in the Weaving" Dara Kanlaya 他. 2001 p.23
- (13) "Lao Textiles and Traditions" Mary F Connors 1996 pp.68-69
- (14) Mary F. Connors によると第2次世界大戦後に合成繊維や合成染料が輸入されてきたとしている。1996
- (15) 『ラオス南部の色彩名と色彩認識に関する研究』 北田 早稲田大学文学学術院文化人類学年報第4巻, pp.55-72 2010. p.69
- (16) 「旅行者のための刺繍—メキシコ・オアハカにおける現代のプッティングアウトシステム」8章 ロナルド・ウォーターベリー 『布と人間』1995
- (17) 『汚穢と禁忌』 1985 メアリ・ダグラス p.155

参考文献

- Annabel VALLARD 2009. Suivre le Fil. Ethnographie d'une Filière Textile à Vientiane (R.D.P. Lao). Université Paris X - Nanterre.
- Bryan Byrne 1999. Subsistence Strategies and the Division of Labor by Gender Among Clothes Makers in Nonindustrial Societies. Cross-Cultural Research, Vol. 33 No. 4, November pp.307-317
- Dara Kanlaya, Khongthong Nanthavongdouansy Saisanith, Viengkham Nanthavongdouansy, et al. 2001. Legends in the Weaving. The Group for Promotion of Art and Lao Textiles: Thailand. The Japan Foundation Asia Center.
- Evance. Grant ed 1999. Laos: Culture and Society. Silkworm: Thailand.
- Mary F. Connors 1996. Lao Textiles and Traditions. Oxford University Press: NewYork.
- Patricia Cheesman 2004. Lao-Tai Textiles: The Textiles of Xam Nuea and Muanphuan. American Press: Bangkok.
- Schneider J 1987. The Anthropology of Cloth. Annual Review of Anthropology16. pp.409-448
- 上東輝夫 1996 『ラオスの歴史』 東京：同文館出版. p.209
- 大村敬一 2010 「自然＝文化相対主義にむけて—イヌイトの先住民運動から見るグローバリゼーションの未来」『文化人類学75-1』 日本文化人類学会. pp.101-119
- 久保 泰朗 2002.8.1. 号 【海外】「ラオスの蚕糸業」日本ラオス協会
- ジェームス・C・スコット 1999 『モラル・エコノミー』 東南アジアの農民叛乱と生存維持. 東京：勁草書房
- ジェーン・シュナイダー 1995 「6章 ルンペルシュティルツキンの取引—初期ヨーロッパにおける民俗と亜麻布製造の商資本家による強化増大」『布と人間』 アネット・B・ワイナー ジェーン・シュナイダー 東京：ドメス出版
- 谷本雅之 1998 『日本における在来的経済発展と織物業』 名古屋：名古屋大学出版会
- 永原慶二 2004 『苧麻・絹・木綿の社会史』 東京：吉川弘文館
- 藤井守一 1986 『染織の文化史』 東京：理工学社
- フィリッパ・スコット 2007 『世界の絹織物文化図鑑』 東京：柊風舎
- メアリ・ダグラス 1985 『汚穢と禁忌』 東京：思潮社
- ラオス文化研究所編者 2003 『ラオス概説』 東京：メコン. pp.246-247
- ロナルド・ウォーターベリー 1995 「8章旅行者のための刺繍—メキシコ・オアハカにおける現代のプッティングアウトシステム」『布と人間』 アネット・B・ワイナー ジェーン・シュナイダー. 東京：ドメス出版

佐藤昌憲 2005『絹文化財の世界—伝統文化・技術と保存科学』東京：角川学芸出版. p.2-23

付記

本稿のもととなる調査の一部は、平成21年度笹川科学研究助成により行った。